

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

高度情報技術化社会となり、好のむと好のまざるを問わず、コンピューターに依存する社会へと変化してきた。IT 機械、機器の洪水である。

今や、自分の囲りをとりまく環境が、近代化、文明化され IT 化された機器が発達、普及するに伴い、それに対応する人間の精神、いわゆる知性的、理性的な能動的、目的意識的な判断を下す「心」の判断力が、それ等に対応、順化できない感がする時代へと変化してきた。それは、進歩、進化に遅くれる「心」である。

ブログやツイッター、SNS（交流サイト）などが普及、高機能携帯電話、いわゆるスマートフォンは日常の生活パターンまでいやおうなしに変えつつある。

変化に対応できない、ついてゆけない人間は高度情報技術化社会からの落後者となるのである。

現代の人間社会は、競走社会であり、弱肉強食の競争の社会に企業も労働者も生き残るしか無いのである。ただ近代化、文明化された人間社会へと変化した高度情報技術化社会は、人間自身の精神性、「心」の進化、向上をあわせて要求する。

それは、今まで以上に、精進、努力し対応する「心」を持つことが必要となる。

そのために、禅僧が各地を行脚し、師となるべき高師、高僧を訪ね修行した雲水の生き方を「頭陀行」に学び変化する環境の中で、十二分に対応できる人間性を養うための心得等を学ぶことにする。

我が国の世界一であったスパコン「京」は、中国製「天河」に追いこされた。挑戦は続くのであり今や国際競争社会は、競争を否定して独占的地位をもつことが不可能の時代ということなのである。

著者：広島大学生物生産学部非常勤講師

元近畿大学産業理工学部客員教授

日本禅画家協会名誉理事

中国少林書画院名誉教授

法号位 法印 禅画位 奥伝

青木伸雄

釋 禪 禪 (野風生)

雅号 樹泉

2. 頭陀行を学び実践

人間社会が複雑になる程、自分をとりまく環境が近代化、文明化する程、人間としての“心”の荒廃が進んでゆく気がしてならない。

先に、原始修験道として、木喰断喰行の苦行の実践として山林抖擻行、木喰戒等について述べたが、ともすると失われる人間としてのあるべき姿、仏教の人間観を再び考えることにする。

サンسكريット語（梵語）のズッタ（dhuta）の音訳が抖擻や頭陀と一般に訳され、その本来の意味は人間としての業や煩惱をふり払い精進、修行することをさし、ともすると安易な生き方をとろうとする人間に衣食住に対する貪欲をはらいのける修行を強いて求める生き方の苦難の行である。

それは、娑婆世界の中で人間としての“心”、いわゆる「他思故有我」、「他の人々を思い考える故に、己れの存在がある」ということであり、人間が本来、持つべき「思いやり」、「気くばり」、「心くばり」を意味する。

いわゆる頭陀行を通じ、「自覚覚他覚行円満行」、結果として、自己自身の置かれている立場を理解し、義務、使命などを知り実践する“心”を持つことであり、それは自ら悟りを開く修行の実践を意味する。

煩惱の垢を払い落とし、ただひたすら人間としての身心を鍛錬する種々の生活規律として、次の十二種類の実践である。

- 1) 糞掃衣（ボロギレの衣をまとう）
- 2) 但三衣（ただ三衣のみで、別の衣をもたない）
- 3) 常乞食（乞によってのみ食を得て生活）
- 4) 不作余食（間食をしない）
- 5) 一坐食（1日1回の食事に甘んじ感謝する）
- 6) 一端食（1食中のその量を節する）
- 7) 空闲処（人里を離れた静かな森で修行する）
- 8) 塚間坐（塚、墓場に坐すること）
- 9) 樹下坐（大樹の下に坐すること）
- 10) 露地坐（常に屋外で坐すること）
- 11) 随坐（場所をえらばず夜具をのべ臥すこと）
- 12) 常坐不臥（常に趺坐して、横臥しない）

等の修行である。

いわゆる、娑婆世界の下品下生者の立場において、己れを、静かに見つめる修行の実践であり、人間の業、煩惱をふり払う修行である。

修業僧が行く先々で食を乞い、露宿などをして仏道を修行する頭陀行の“心”をもって「他思故有我」の生き方をしたいものである。無我の実践である。